

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

RCC主催講演会

道のなかつたことはない 道は必ずついてくる
— 聖隷福祉事業団の歩みから —

講師 浜松学園副園長 山本 誠氏

一月一四日（火）一三時
二〇分から一五時にかけて、西
宮聖和キャンパスのメアリー・
イザベラ・ランバスチャペルで、
「キリスト教主義教育の可能性
と実践」プロジェクトによる講
演会が開催され、講師として、
聖隷福祉事業団浜松学園副園長
の山本誠氏をお迎えしました。

学内外あわせて八四名の皆さん
が出席され、とくに教育や福祉
の活動においては隣人愛の追求
が肝要であることをあらためて
認識する、貴重な機会を共有す
ることとなりました。

講演要旨は以下のとおりで
す。

山本氏は、当該事業団が展開
してきた様々な事業実践と理念
を中心に、現職である浜松学園
とそこで育つ生徒たちの変化す
る姿に触れながら講演されまし
た。とくに、これらの実践が、
どのような状況のなかでも「隣
人愛」という聖隷事業団の理念
に基づくものであることの重要
性を、現実の壁を突破して道を
拓いた創設者の姿を追いなが
ら、実践困難な現実的側面も交
えて、お話しくださいました。

この講演会には、聖隷事業団
に関わる実践者の方々も含め、



『隣人愛』は、聖隷福祉事業
団が創設時から大事にしている
理念です。法人の名称である「聖
隷」は聖なる神様の奴隷になる、
僕（しもべ）になるという意味
を持っています。一九三〇年に

結核を患った青年に寄り添い、
介護することから始まった私ど
もの事業は、今や全国二二三施
設で展開され、一六、〇〇〇名
以上の職員が働いています。病
院や予防検診事業、高齢者や障
がいのある人の施設、保育所・
こども園など、医療福祉全般に
及びます。日本で最初の特別養
護老人ホーム・有料老人ホーム
を開設し、未熟児センター、ベ
トナム難民の受入れ、ホスピス
やドクターヘリ事業など、国内
のモデルになるような事業を展
開してきました。

創設の中心となった長谷川保
は、目の前にいる結核の患者さ
んと共に生き、地域で必要とさ
れていることを自らが率先して
やってきました。長谷川が遺し
た書籍に散りばめられている言
葉のいくつかを紹介し、その思
いを次の世代にも伝えていけれ
ばと思っています。

「すべての面で質の高いもの、
レベルの高いものを追求しろ」
：最低限で、基準さえ満たせ
ば良いのではなく、その時々
にその分野において最高レベルの
ものを備えることが大事。国内
で結核治療に外科的手術が始

まったばかりの頃、最新の手術
室を用意し、外科医の第一人者
を都市部でもない静岡まで招聘
したこともありました。

「一番大切で確実なことは、
世の中が必要としていることを
全力を挙げて果敢に実行するこ
とだ」：お金があるからやる、
ないからやらない。大変だから、
難しそうだからやる・やらない
ではなく、求められていること
であれば自らが必死になつて取
り組んできました。

理念は語られるだけではな
く、日々の実践に結びついてい
なければなりません。理念とし
て掲げられている『隣人愛』を、
誰もがわかる言葉として、いの
ちと尊厳のために、施設を利用
される人々のために、地域社会



とともに、未来を築く、最高のものを、と置き換えながら、大切な使命として現在も受け継いできています。

どんな時代になろうとも、どんな困難があつたとしても、先達たちは神様の守りの中で「道のなかつたことはない、道は必ずついてくる」と祈り、実践してきました。その積み重ね

が、それぞれの事業を振り返るとき、道となつてきたことを実感します。必要とされる仕事を、私たちがこれからも率先してやっていきたいと思います。創設の理念が、たとえ時代が移り変わったとしても、その時々になつた言葉で語られ、継承されていくことを願います。
(報告者 センター副長 梶原直美)

研究プロジェクト報告

研究プロジェクト

戦争の記憶と想起——平和への警告とその継承

【公開研究会報告】

関西学院高等部における『探究型授業×平和学習』の取り組み

講師 関西学院高等部 教諭 西室 雅央氏

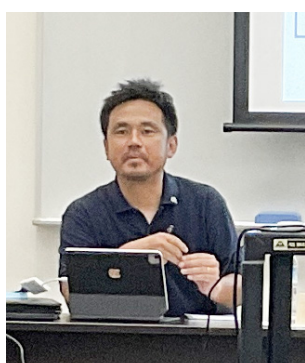
二〇二三年七月二一日（金）

に関西学院大学吉岡記念館にて RCC 研究プロジェクトの一つである「戦争の記憶と想起」の第二回研究会を行いました。「関西学院高等部における『探究型授業×平和学習』の取り組み

み」を主題として、関西学院高等部英語科教員であり探究型カリキュラム授業担当者でもある西室雅央氏を講師にお迎えし、生徒自身による平和学習の取り組みについてお話を伺い、実際にその学習成果に触れることが

できました。

関西学院高等部では二〇二〇年から二年間をかけて西室氏の担当で「ピーススタディ」と題する必修の探究型選択授業が実施され、高等部の生徒一名が平和について学習活動を展開しました。「平和をいかに実現するか」を問いとして生徒たちが主体的に学習を進める中で、戦争について経験者として話せる人がいなくなっていること、関西学院にも戦争を知らず平和について実感をもつて考えることが容易ではない若者が大勢いること等が課題として挙げられたそうです。そのような状況を踏まえて、自分たちに出来ることはないか検討が進められ、アイデアとして出されたのがスマホアプリを通して戦時下の出来事に関する学びが実現できないかということでした。



そこから戦時下の関西学院を中心とした出来事の調査と AR (Augmented Reality、拡張現実) の技術を用いたスマホアプリについての調査が進められました。ARとは、現実の世界に仮想世界を重ねて表示することで現実世界を情報付加によって脚色、拡張する技術を指します。例えば、ARを用いたスマホアプリのゲームを起動して街を歩けば、スマホ画面には目の前の通り道がスマホカメラによって映し出され、と共に、現実には存在しないキャラクターがスマホの画面上ではまるでその通り道に存在するかのように映し出され、動き回ります。最終的に生徒たちが作成したのが AR アプリ「マチアルキ」と結びついた KG PEACE MAP です。
(https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_hs_tankyu_site_2022/img/kgpiecemap.pdf)。このアプリをスマホで起動して学内を歩くことで戦時下での関西学院の様々な出来事について知ることが出来ます。

今回の第二回研究会の後半には参加者一同で会場を出てキャンパス内をスマホ片手に歩いて回りました。例えば上ヶ原キャンパスの象徴とも言える時計台前でアプリの起動するスマホをかざせば、画面上にはスマホカメラを通して時計台が映し出されると共に、AR技術によつて戦時下での時計台の情報が、すなわち爆撃の対象とならないよう黒塗りの時計台になつていたことが表示されます。同じようにキャンパスの様々な場所と同様の情報をアプリの拡張現実を通して知り、平和に思いを寄せることができました。

アプリのダウンロード方法を含め、興味のある方はぜひ上述の URL から KG PEACE MAP の詳細を確認してみてください。

(報告者 研究員 橋本祐樹)



■研究プロジェクト

ユダヤ人もギリシヤ人も——越境する聖書理解を求めて

研究プロジェクト「ユダヤ人もギリシヤ人も——越境する聖書理解を求めて」においては、第三回目の研究集会を二〇二三年一月一日の一五時より一六時半の予定でズームにて開催しました。参加者は京都大学文学研究科の津田謙治氏、日本同盟基督教団中原キリスト教会牧師・東京基督教大学の山口希生氏、関西学院大学商学部宗教主事の木原氏、そして神学部の浅野の四名でした。第三回の研究集会では、京都大学の津田氏が「パウロとユダヤ主義——ハルナック『マルキオン』の議論を巡って」と題して発表されました。この発表は津田氏が訳者として出版された、アドルフ・フォン・ハルナック著『マルキオン——異邦人の神の福音』（教文館、二〇二三年五月）の内容に依拠しており、マルキオンがパウロとユダヤ教との関係性を

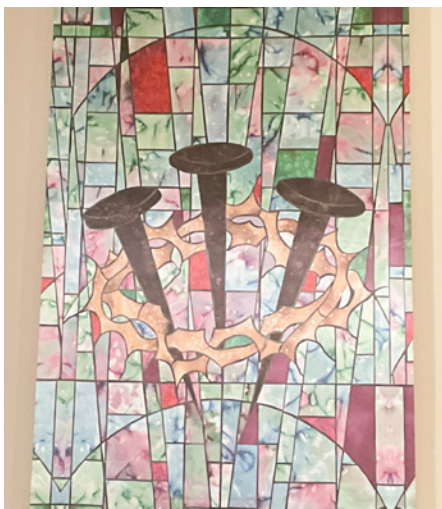
理解したかに関するハルナックの論考をまとめたものです。本発表では、まずそれぞれ「律法と福音との対立」、「旧約聖書」、「ユダヤ人」、「新約聖書」、「パウロ」に関するマルキオンの理解を概観し、その上で彼のパウロ考およびユダヤ教考に関するハルナックの理解が提示されました。そしてハルナックがマルキオンを、パウロの意図につらなる仕方での福音の純粋性を保持しようとした宗教改革者として提示していることが明らかにされました。マルキオンがユダヤ教のヤハウェ神を創造神として捉えつつも、のちのグノーシス的な世界観においてそうであるように、悪なる神として理解していなかった点は、研究集会参加者にとっては非常に示唆的でした。次回の研究集会では、木原氏からの発表が予定されています。

（報告者センター長 浅野 淳博）

キャンパスの中のキリスト教シンボル（17）

「うっすらと見えるのいいんだよ！」関西学院を訪れたティリツヒは、ランバス記念礼拝堂の正面のうっすらと見える十字架をこのように高く評価したという。では、もしティリツヒが法学部チャペル正面のバナーを見たら、何と評しただろうか。

このランバス礼拝堂のうっすらとした十字架に対して、法学部チャペルのバナーは、いばらの冠と三本の釘によってイエスの十字架を表している。イエスは、死刑確定後、ロー



マの兵士に（おそらくみすばらしい）紫の衣を着せられ、いばらで編んだ冠をかぶせられた（マコ一五・一六―二〇）。紫の衣も冠も、ローマ世界では、王であることを象徴するものであった。このようにローマの兵士はイエスに、「ユダヤ人の王」を僭称したという無実の罪をかぶせ、恥辱を与えてもてあそんだ。いばらの冠は、イエスの受けた恥を象徴する。また、イエスは十字架に釘づけにされた（ヨハ二〇・二五、コロ二・二四）。十字架刑はローマに反逆をくわだ

てた下層民に用いられた処刑方法であった。三本の釘はイエスの苦しみ

を象徴する。さて、十字架をシンボルにしたキリスト教は、「私たちは弱い時に強い」というメッセー

ジよりも、罪の贖いという教会の宣教のスローガンのほうを強く示す。また、十字架は制度的な教会を象徴しており、「教会の外に救いなし」（extra Ecclesiam nulla salus）のメッセーを暗に含めてしまう。さらに、「十字軍」のように他宗教攻撃のイメージも帯びてしまった。

それに対して、いばらの冠は、西光万吉が一九二三年に全国水平社の旗に選んで以来、日本では、キリスト教を越えて、被抑圧者の苦しみと闘いの象徴となった。「荊冠」すなわちいばらの冠は、無実の罪と恥に無言を貫くことで闘ったイエスの姿と、差別と闘う被差別者の姿を重ねる。それと同時に、水平社宣言が「殉教者がその荊冠を祝福されるとき」と高らかに宣言する被差別者の解放を指し示す。このように、いばらの冠は、宗教や思想を越えて、貧困や差別と闘う者の連帯の象徴となることができるのである。

（報告者 法学部教授 大宮 有博）